

千夜一夜の頭痛物語

【第一話】新型コロナウイルスの頭痛医療への影響 その28
 複数回の新型コロナワクチン接種後に続発した帯状疱疹、連動して皮疹以外の症状になることも？

文
清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

新型コロナウイルス4回目ワクチン接種は、オミクロン株にも対応した2価ワクチンも推奨されている現在ですが、今回は、仕事上どうしても4回目ワクチンを受けざるを得なかった某航空会社の客室乗務員の女性のお話です。

実はこの女性、2年前に背部に带状疱疹を発症し、その際に抗ウイルス薬で加療し、完治しましたが、今回仕事上どうしても国際線フライトで渡航する機会が多いため、4回目のワクチン接種を推奨され、あまり気が進まなかったのですが、やむなくワクチン接種を受けたのでした。

直後の副反応はほとんどなく安心していましたが、約1カ月経過したころから左眼瞼がピクピク痙攣しはじめ、2〜3日経ってもやまないため受診されました。片側の眼瞼痙攣には、いくつか原因があります。例えば脳血管が顔面神経の起始部で神経を圧迫していることもあり、このような際には神経血管減圧手術を行うことで改善しますが、通常このような原因の場合、突発的に起こることは少なく、突然に発症する際には、何らかの原因により免疫力が低下した際に、神経節に潜在している帯状疱疹ウイルスが活性化して起こることが多いのです。

頭部MRIを施行しましたが、この症状を説明する明らかな病変もなく、また脳血管による顔面神経の圧迫もなかった。

ため、消去法で診断すると带状疱疹ウイルスの活性化が原因と考えられたため、即座の抗ウイルス薬の経口投与を開始したところ、翌日には眼瞼痙攣は止まりました。しかし3日後に同じ左の大腿部に痛痒い皮疹が出現し、带状疱疹が姿を現したのでした。

神経節はすべて脊髄でつながっているため、下肢の神経節で带状疱疹ウイルスが活性化し始め、その刺激情報が顔面神経節へと伝わり眼瞼痙攣として活性化のサインを送っていたものと考えられました。幸い抗ウイルス薬を服用していたため、大腿部の带状疱疹も軽症で済んだのですが、この女性のように通常带状疱疹を発症すると、免疫抗体はウイルスに反応して急激に上昇するため、少なくとも5〜10年くらいは再発しないのが通例ですが、おそらく複数回のワクチン接種により新型コロナウイルスの免疫抗体が圧倒的優勢になり過ぎ、免疫のバランスが崩れて、想定外の短期間に带状疱疹を発症したものと考えられる症例でした。

左眼瞼痙攣後に同側に発症した
大腿の膝部带状疱疹



Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーフケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。『頭痛女子のトリセツ』（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる 頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
 監修/清水俊彦 推薦/佐渡島庸平
 新紀元社 (1,100円(税込)) 販売中。